

# メルカトルの級数



$$1 - \frac{1}{2} + \frac{1}{3} - \frac{1}{4} + \frac{1}{5} - \frac{1}{6} + \dots = \log 2 \quad \dots (*)$$

今回は、1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, ……という自然数の数列に、初項から順に(-1)をかけていったものの逆数をとって、無限に加えていくと  $\log 2$  に近づいていくという「メルカトルの級数」を証明します。

$$1, \overset{-2}{\curvearrowright}, \overset{3}{\curvearrowright}, \overset{-4}{\curvearrowright}, \overset{5}{\curvearrowright}, \overset{-6}{\curvearrowright} \dots \dots \text{【自然数列に順に(-1)をかける】}$$

$$\times(-1) \quad \times(-1) \quad \times(-1) \quad \times(-1) \quad \times(-1)$$

この数列の第  $n$  項は  $(-1)^{n-1} n$  と書けるので、その逆数の無限級数の和に

記号  $\Sigma$  を使うと、(\*)は  $\sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} \frac{1}{n} = \log 2$  と書ける。この結果の

$\log 2$  の底は「ネイピア数  $e$ 」( $\approx 2.71828\dots$ )であり、 $\log 2$  は「 $e$ を何乗したら2になるか」という数。なお、メルカトルは、「メルカトル図法」で知られる地理学者のゲラルドゥス・メルカトル(1512~1594)ではなく、著書『対数術』で知られる17世紀の数学者ニコラス・メルカトル(1620~1687)である。彼は『対数術』の中でこの級数を紹介した。

**【証明】** まず、初項1, 公比  $-x$  の等比数列の初項から第  $n$  項までの和を考える。

$$1 - x + x^2 - x^3 + x^4 - \dots + (-x)^{n-1} = \frac{1 \cdot \{1 - (-x)^n\}}{1 - (-x)} = \frac{1 - (-x)^n}{1 + x} \quad \dots \dots \textcircled{1}$$

今、 $\textcircled{1}$ の両辺を  $x=0$  から  $x=1$  まで積分すると、

$$\int_0^1 \{1 - x + x^2 - x^3 + x^4 - \dots + (-x)^{n-1}\} dx = \int_0^1 \frac{dx}{1+x} - \int_0^1 \frac{(-x)^n}{1+x} dx \quad \dots \dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{2} \text{の左辺} = \left[ x - \frac{x^2}{2} + \frac{x^3}{3} - \frac{x^4}{4} + \dots + \frac{(-1)^{n-1} x^n}{n} \right]_0^1 = 1 - \frac{1}{2} + \frac{1}{3} - \frac{1}{4} + \dots + \frac{(-1)^{n-1}}{n}$$

$$\textcircled{2} \text{の右辺} = [\log|1+x|]_0^1 - (-1)^n \int_0^1 \frac{x^n}{1+x} dx = \log 2 + (-1)^{n+1} \int_0^1 \frac{x^n}{1+x} dx$$

$\textcircled{2}$ の左辺は、無限級数  $\frac{1}{1} - \frac{1}{2} + \frac{1}{3} - \frac{1}{4} + \frac{1}{5} - \frac{1}{6} + \dots$  の部分和であるから、

$$\sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} \frac{1}{n} = \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ 1 - \frac{1}{2} + \frac{1}{3} - \frac{1}{4} + \dots + (-1)^{n-1} \frac{1}{n} \right\} = \lim_{n \rightarrow \infty} (\textcircled{2} \text{の左辺}) \text{ となる。}$$

ここで、積分区間  $0 \leq x \leq 1$  において、まず  $1+x \geq 1$  だから、 $0 < \frac{1}{1+x} \leq 1$

辺々に  $x^n \geq 0$  をかけて、 $0 \leq \frac{x^n}{1+x} \leq x^n$  (等号は  $x=0$  のときのみ成立) であるので、

$$0 < \int_0^1 \frac{x^n}{1+x} dx < \int_0^1 x^n dx = \left[ \frac{x^{n+1}}{n+1} \right]_0^1 = \frac{1}{n+1}, \quad \text{さらに、} \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n+1} = 0 \text{ だから、}$$

「はさみうちの原理」より、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \int_0^1 \frac{x^n}{1+x} dx = 0$  が成り立つ。ゆえに、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} (\textcircled{2} \text{の右辺}) = \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ \log 2 + (-1)^{n+1} \int_0^1 \frac{x^n}{1+x} dx \right\} = \log 2 + (-1)^{n+1} \times 0 = \log 2 \text{ となり、}$$

$\sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} \frac{1}{n} = \log 2$ , すなわち、(\*)が証明されたのである。 **【終】**

1,  $-\frac{1}{2}$ ,  $\frac{1}{3}$ ,  $-\frac{1}{4}$ ,  $\frac{1}{5}$ , …… という有理数を無限に加えていくと、 $\log 2 = 0.69314718\dots$

という無理数に収束する。この驚きの結果が、ライプニッツ(1646~1716)に先んじて、ドイツ出身でイギリスに渡って学んでいた数学者ニコラス・メルカトルによって発表された。 $\log 2$  は特別な数であるという印象を持つ。他にも  $\log 2$  に収束する級数がある。

**【例題】** 極限值  $S = \lim_{n \rightarrow \infty} \left( \frac{1}{n+1} + \frac{1}{n+2} + \frac{1}{n+3} + \dots + \frac{1}{2n} \right)$  を求めよ。

$$\text{【解答】 } S = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \left( \frac{1}{1 + \frac{1}{n}} + \frac{1}{1 + \frac{2}{n}} + \frac{1}{1 + \frac{3}{n}} + \dots + \frac{1}{1 + \frac{n}{n}} \right)$$

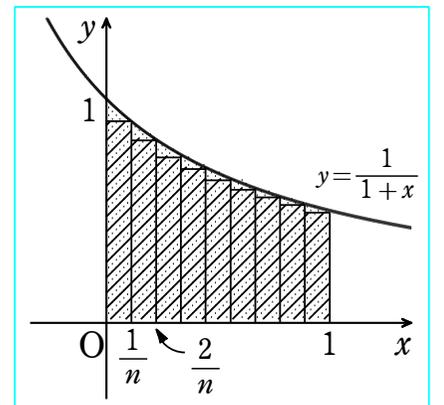
$$= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \left( \frac{1}{1 + \frac{k}{n}} \right)$$

よって、 $f(x) = \frac{1}{1+x}$  とすると

$$S = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n f\left(\frac{k}{n}\right) = \int_0^1 f(x) dx$$

$$= \int_0^1 \frac{dx}{1+x} = [\log|1+x|]_0^1$$

$$= \log 2 \quad \text{【答】} \quad \text{【「区分求積法」を用いた】}$$



**【コメント】** 実は、メルカトル級数は、式変形によって【例題】の級数と等しくなるのである。

つまり、 $\sum_{k=1}^{2n} \frac{(-1)^{k-1}}{k} = \sum_{k=1}^n \frac{1}{n+k}$ , 解説は次の機会とするが、なぜこうなるのか考えてみよう。